

## 復員

太宰府市 平田 昌苗

まさにそれは奇跡であった。タベのマラリヤ熱が残っていない。夜の12時頃上がって朝の8時、9時までは尾を引いて残っていた熱なのに。今朝は何となくやつれていた体中が気持ちいい気分、目は窪んでくりくりするが風が爽やかに感ずる。昨夜から今日の行軍はどうしようか、歩けるかしらと思っていた。今日はやっと船が入港して3日目の引揚兵収容所を出て、故郷の土を踏める日が来たのである。長崎県佐世保市近くの南風崎の朝、当時は4年余りの軍隊生活の終り、私はもう26才になっていた。

早朝数棟に分かれた広い倉庫の宿舎より、すし詰め寝ぐらから一斉に出て来た千数百名の引揚兵が、みんな50kg前後の荷物を担いで右往左往している。荷物は武器解除をした軍服に、背囊には毛布と外被を巻きつけ、中身は検問を受けた私物の他、復員に軍より支給された日用品、米、乾パン等ギッシリ詰ってとても重かった。まだ軍帽の星章も階級章も剥ぎ取っていなかった。

白いヘルメットの米兵が来て、全員を6列縦隊に整列させた。病み上りの私は足にマメの出来ている者達とともに別に分けられて差迎えのジープに乗せられ、やがて出発。行程は5、6kmぐらいだったろうか、ジープだったのでよく憶えていないが、着いたのは南風崎の貨物兵站駅であった。今日は頑張っただけで歩かず、死んでも歩かず、歩かなければ家には帰れないと思っていた。私は米軍の配慮が身に沁みだ。なかなか要領よく合理的にやるなと思った。日本の軍隊は、倒れたら蹴飛ばしてでも歩かせた軍隊だったが…。

さあ、これに乗れば後は家族の待つ福岡だ。やがて列車がプラットホームに入って来た。貨車だ。客車ではない。皆が一斉に乗り込んだ。乗るわ乗るわ、荷物の上にも人の上にも人と荷物が何重にも重なって乗った。車輛が少ない。考えてみると敗戦国だからなのだろう、配車が少なかったのだ。便所に行くことすらできない程、戸を閉めると真っ暗になった。下積みの者は堪えられない。それでも皆嬉しくて不平を言う者はいなかった。

やがて乗車完了。貨車がゴトリと動き出した。が外の景色は見えない。夜は明けているのだが…。時折扉の附近に陣取った兵隊が、細目に開けた扉の間より見える外の景色を見て、暗すみの戦友達に、海岸の景色が綺麗だとか、トンネルに入るぞとか、はしゃいで戦友達に知らせた。

人吉、八代、熊本と通過して上り線をノンストップで走った。しばらくして入口の連絡の兵隊が、停車駅は久留米から二日市、博多だと伝えた。皆は口々に、それなら俺は久留米だとか、二日市で降りたが都合がよいとか自分の方針を決めて停車の来るのを待っていた。早くちょっとでも外を見たいのだが、暗くて全然見えない。ただ暗闇の故郷の景色を空想してジッと我慢していた。

着いた。博多。「博多、博多」の呼び声のない博多。車輛の5分の1ぐらいの人員だったらろうか兵隊達は降り立って、列車に乗り継いで行く戦友達に手を振った。過去数年間一命を共に暮らした戦友達との別れはあえないものだった。このまま別れていいのかと思った。挨拶する間もなく、除隊式もなく、三三五五手を振って別れを惜しむのが精一杯だった。一同整列して上官の除隊式の挨拶があるものかと思っただけに、淋しい思いであった。

満州（現在、中国東北地方）へ渡る時は貨車搭載で、馬糞だらけになったプラットホーム。馬が暴れて兵隊が死んだことのある博多駅のホーム。今またそこに私は降り立った。感慨はひとしおであった。

昔あったはずの駅前の市場も店も涼々と焼跡となり、浦島太郎さながらの線路が無言で延びていた。でも懐かしかった。

たくさんな兵隊達が急に蜘蛛の子を散らすように駅前広場に散っていった。

今日帰るとかいう復員の知らせもない突然の復員だったので、迎いの関係者も無く、家ではひたすら兄や父を待っているのだらうけど、何の発表も情報もないその時の状況では仕方のないことだった。附近を歩いている市民は早朝なのでまばらであったが、あまり急な復員兵の出現に、怪訝そうな顔をして、「どちらから復員されたのですか」と言い寄って集まって来た。「満州からです、朝鮮からです」と答えると、家の父は、兄はまだかなあと淋しそうに離れていった。

私はしばらく駅前広場につっ立って、呆然と焼野を眺めていた。広場からポーンと海の方が見えた。市街地は建物は無く、それでいてポツリと遠くの市電の走っているのが見えた。

なかなか電車は来なかった。一人になった私は、大方この辺だったと思って停留所に行き、さて切符はと売場がない時は車輛でと、そこは勝手知ったる故郷だった。

福博線（環状線）を住吉、渡辺通り1丁目、と回って天神町へ出た。私の目は変わり果てた焼野の車窓の景色に吸い込まれていた。ああ、あそこもやられている、ああ、ここもやられたかと、感慨深かった。天神町から久留米行き急行電車に乗り換えて、薬院、平尾、高宮と近づいて来る。高宮は焼けていないかと、私は駅から見える我家を探した。…あ、あった。我が家は健在だった。車窓から二階家が見えた。

「ただ今っ」と我が家の玄関に立ったのは、下車して5分位の後である。背中 of 大きな荷物のお陰で、病み上りの痩せ細った私の身体はやや前に傾いた姿勢で、でも不動の姿勢で立っていた。午前7時。朝まだ早い時間で、家の者達はそろそろ起き出る時間であった。

一番に妹達が2人、「アッお兄ちゃんじゃない！」と廊下の奥から飛び出して来た。続いて母が「アラッ、ターチャンお帰りなさい」と顔を泣き顔にして走り出て来た。言葉もない。しばし玄関の上と下にて、立っていた。私は挙手の礼をして立っている。下の妹は初対面の人に会うような顔をして、これが私の兄さんなのだというような顔をして手を口に当て、やや恥らいを見ている。上の妹はいつの間にか成長した娘になって白く肥っているかに見えた。皆言葉は無かった。そして皆一度に涙が溢れ出た。

ややあって荷物をおろし、座敷に入った私は、先づ神棚の父に帰還を報告し、出された母のお茶を口にしました。そして復員に持たされた支給の靴下に入れた米、乾麺炮、牛罐など出してせめてものみやげと差し出した。また「何か食べたい物はないの」との注文に、缶詰生活の私は間引菜の入った菜っ葉の味噌汁を注文したのである。

そして一番復員して感じたのはすぐ捻ると出る水と、すぐ点灯する電灯の光の有難さだった。考えるとそれから50年なのだ。